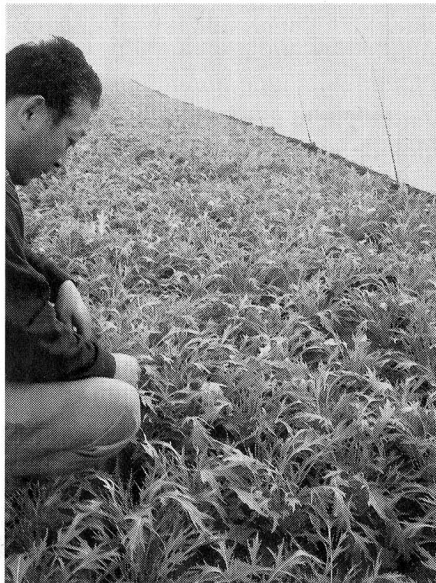


ミズナ産地 県内で拡大

全国一の北浦に続く



ミズナの生産が増えている鹿行地域＝鉦田町

けいざい トレンド

県内の農産物産地でミズナの栽培が拡大している。北浦町がここ数年で全国一の産地となった成功事例に習い、追随組が出てきているためだ。鹿行地域で特にこの傾向が強く、メロンの代替作物にする動きもある。ただ価格は一時の勢いがなく、生産過剰を心配する声も聞かれる。

生産過剰懸念の声も

鉦田町に本店がある広域農協、JAかしまなどのミズナ栽培は二〇〇三年から始まった。「昨年の販売額は初年度の二倍、七・八億円になる見込み」（販売課）とい

予想。両農協とも空いたハウスで栽培する代替作物としてミズナに着目しているという。もともと京野菜のミズナは鍋用として流通量が限定されてきた。ところが市場との連携で、JAなめがた（本店生田町）が〇一年度から主に北浦町で生産を手掛けるようになり、あっという間に有力産地となった。昨年十一月の東京都中央卸売市場の販売実績は、茨城産が同町を中心に四千二百五十二トンと実に75%のシェアを占めている。消費者側の需要も堅調だ。鍋用のほかサラダなどの食べ方についても、「大手食品会社のドレッシングのテレビCMがきっかけ」（県園芸流通課）となり普及したためだ。

一方、同じ鹿行地域のJA茨城旭村（本店旭村）でも、昨秋に「水菜部」が部員約四十人で発足。「周年栽培するのはまだ数人で、鍋の需要期に手掛ける程度」（園芸販売課）だが、ミズナへの関心は高まっている。

ミズナが注目される理由に①栽培期間が一月と短く年に何回も収穫できる②葉物野菜でも収量が多い③高値で販売できるなどが挙げられる。

加えて、全国有数のメロン産地として知られる両農協管内では、メロン生産の規模縮小傾向が背景にある。「市場価格の低迷に加え、連作障害による土壌疲労が深刻化しており、コストに見合う売価がつかれない」（JA茨城旭村の山本美智男課長）ためだ。JA茨城旭村では今年メロン作付けが「二十〜三十畝減る」（山本課長）見込み。かしまなど農協も「今年の作付けは13%減る」（販売課）と

したジャンルに格上げした。県も昨年十二月、北浦町をミズナの銘柄産地に指定した。

ミズナの産地は埼玉県や千葉県、最近では岩手県など東北地方へも拡大している。そのような中、県内での急速な産地・生産量拡大の先行きを危ぶむ見方もある。

全農県本部によると、一昨年に一袋三百〜五百五十円だったミズナの末端価格は昨年末に九十八円まで落ちた。JA茨城旭村の山本課長は「価格は転がった。これからどう転がるか分からない」という。

一方、「正念場でありチャンスでもある」とする意見もある。農業生産法人「ビュア・グリーン・アグリ」（本社鉦田町）の木村貴浩社長は「価格は落ちてはいるが、用途がオールラウンドのミズナは一時のはやりではない。今を生き残れば本場の産地になれるはず」と品質に磨きをかけた。

茨城産のミズナをアピールしようと、全農県本部は一月中旬から下旬にかけて大手ドレッシングメーカーのテレビCMとタイアップした量販店での販売PRをする。同本部園芸課の大和田晃さんは「品質管理と需要掘り

起こしを並行して生産を拡大することが必要」と戦略を話す。